

堀川 祐里（編）

『労働環境の不協和音を生きる ——労働と生活のジェンダー分析』

（晃洋書房、2024年12月、250頁）

跡部 千慧



本書は、現代日本社会において、生きることが軽視されていることに、異なる学問を専門とする9人の著者が改めて切り込もうとしたものである。私たちは生きるために働く。しかしながら同時に、仕事によって生活や健康、命が脅かされることがある。言換すると、労働と生活のバランスが崩れ、生活が過度に軽視される事態が往々にして起きる。

この「労働環境の不協和音」は、特に新型コロナウイルス感染症の世界的な流行によって顕在化した。コロナ禍は、ケア労働者や非正規雇用者に占める割合が大きい女性の労働環境に深刻な影響を与えた。だが、こうした女性の労働問題は、コロナ禍に突然始まったわけではなく、これまでも根深く存在し、同時に不可視化されてきた問題だった。

本書は、社会政策の包摂する領域である「労働と生活」をキーワードに、ジェンダーの視点から議論を積み重ねていく。そして、本書で明らかにする「労働環境の不協和音」は4つに分類できる。第1は、生活領域が極限までそぎ落とされた労働領域の実態である（本書の特に第1章から第4章にかけて言及した）。第2は、妊娠・出産・子育て・介護が加わると、労働も生活も立ち行かないという、日本の政策設計である。コロナ禍は人々の日常生活における労働がクローズアップされ、多くの人々がこの政策設計の欠点を体験することとなった（第5章から第7章で言及した）。第3は、女性に偏ったケア労働である（第1章と第3章、第4章で示した）。第4に、従来の社会政策が射程に収められていなかった働き方をする人々である。コロナ禍に最も影響を受けたのはこれらの人々であると言える。第8章で描かれるような日本の社会保障による生存権保障が手薄い人々が真っ先に「労働環境の不協和音」の影響を受けたのである。

以上のように、本書は、コロナ禍で改めて認識された労働者が生きることにつながる課題を論じた。その際に意識したのは、ジェンダー分析という方法論である。本書は、コロナ禍によって浮かび上がった労働問題について論じるため、女性に重きをおくことにはなるものの、男性やいわゆる性的マイノリティを対象に含めるだけに留まらず、労働と生活に脆弱性をもつ人々も射程に収めながら、複数の属性や要因が交差する中での問題に着目し、ジェンダー、セクシュアリティを包括的に分析していくことを意識した。

本書が社会問題をジェンダー視点から再構築して理解する一助となり、「労働環境の不協和音」を生きる糧になれば幸いである。

（あとべ ちさと 東京都立大学人文社会学部助教）